



Title	批評するアーカイブ：カビール・プロジェクトとウェブサイト「驚異の街」
Author(s)	宮本, 隆史
Citation	言語文化研究. 2022, 48, p. 153-173
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/87091">https://doi.org/10.18910/87091</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 批評するアーカイブ：

### カビール・プロジェクトとウェブサイト「驚異の街」

宮本 隆史

## Archives and Social Critique: The Kabir Project and the Website *Ajab Shahar*

MIYAMOTO Takashi

This paper focuses on the activities of the Kabir Project, which is building a web-based archive that includes poems by the 15th century poet Kabir, video recordings of musicians' performances, and a variety of interviews. The Kabir project started in 2003 as an art project of Shabnam Virmani, who has documented the performances of the musicians who sing Kabir's poems and produced documentary films and CD books on the subject. The project launched a website, *Ajab Shahar*, in 2020, where video, audio, and text data of recorded songs and interviews are available in a searchable format. This paper discusses how *Ajab Shahar* critiques contemporary society and the idea of the archive.

キーワード：南アジア，アーカイブ，カビール

### 1. 序論

本稿の目的は、15世紀に北インドで活躍した詩人カビールの詩とそれを歌い継ぐ楽師のパフォーマンス映像の「アーカイブ」を構築するカビール・プロジェクト (Kabir Project)<sup>1)</sup>の活動に注目し、その映像作品とウェブサイト「驚異の街 (*Ajab Shahar*)」<sup>2)</sup>の内容を読み解くとともに、それがデジタル技術を背景としてどのようなメディア効果を持ちえているのかを考察することにある<sup>3)</sup>。カビール・プロジェクトは、2003年に映像作家のシャブナム・ヴィルマーニーが開始したアート活動である。彼女はこれを、2002年に西インドのグジャラート州で起きた宗

1) <http://www.kabirproject.org> \*以下ウェブサイトの最終閲覧日はすべて2021年9月15日。

2) <http://ajabshahar.com>

3) なお、カビールのテキスト解釈を展開することは残念ながら筆者の能力を超える。本稿で提示する詩の解釈はカビール・プロジェクトの作品に沿ったものとなることをご了承いただきたい。

派暴動への反応として開始した。宗派やカーストを否定したカビールの詩を歌う楽師たちの記録を提示することは、宗派的原理主義への対抗的なパフォーマンスとして理解できる。彼女は、カビールの詩を歌い継ぐ楽師たちの演奏を記録し、ドキュメンタリー映画とオーディオCDを発表した。制作されたコンテンツの多くは、2020年に公開されたウェブサイト「驚異の街」で「アーカイブ」として検索し視聴できるようになった。これは、それまでの作品で語られた物語を、閲覧者がウェブ・ブラウザ上で並べなおし、多様なかたちで読めるようにしたものである。これら一連のカビール・プロジェクト作品を、南アジア社会とデジタル・ネットワークの文脈において、いかに読解できるかを提示することが本論文の目標である。

デジタル技術によってアクセス可能性を高め、情報の「民主化」を促進するといった効用は、オンラインのコレクションやアーカイブの存在意義として繰り返し強調されてきた。また、ウェブ・ブラウザ上でコンテンツを動的に組み替えることで、「非線形 (non-linear)」で多様な読みが可能になるということも早くから唱えられた<sup>4)</sup>。しかし、アート活動の一環として公開された、カビール・プロジェクトの「アーカイブ」が、「より便利に、よりクリエイティブに」というデジタル時代のアーカイブ言説に、ナイーブに便乗するものととらえるのは単純すぎるだろう。では、この「アーカイブ」はいったいわたしたちに何を問いかけているのだろうか。本稿では、カビール・プロジェクトの「アーカイブ」が、アーカイブなるもの自体が持つ権力性を、行為遂行的に示しているのだと論じたい。

以下では、第2節で、カビール・プロジェクトの作品を読解するための背景を確認する。カビールがなぜ宗派対立への対抗的な記号となりうるのかを確認し、現代インドにおける政治と宗派の関係を見る。第3節では、2008年に作品として発表された映像作品と、2020年に公開されたウェブサイト「驚異の街」の内容を確認する。続く第4節では、インド共和国の連邦首相ナレンドラ・モデーの政治言説を検討し、そこでカビールがいかに引用されるのかを見る。第5節では、本論の議論をまとめたくうえで、アート作品としてのウェブサイト「驚異の街」の効果についての筆者の解釈を示す。

## 2. カビール・プロジェクトの背景

カビールの生没年ははっきりとはわかっていないが、1398-1518年とするのがカビールを最高実在の化身として奉じるカビール派 (Kabīr panth) の伝統である<sup>5)</sup>。「カビール (Kabīr)」(アラビア語起源で「偉大な」の意)とはアッラーの99の名前のひとつであるが、しばしばヴィシュヌ派の出家者が用いる「ダース (dās)」(神に服従する者を意味する)をつけて「カビール

4) たとえば、Cohen & Rosenzweig [2006] を参照。歴史研究における叙述とデジタル技術の関係についての批判的考察は続けられている [Burton 2021]。

5) 120年という長い生涯は疑わしいとし、没年を1448年頃とする研究者も多く、橋本もこの年を採用している [カビール (橋本訳注) 2002: 3]。

ダース (Kabīrdās)」とも呼ばれる。バナーラスで下層のムスリムのジュラーハー (織工) の家に育ったとされる<sup>6)</sup>。彼が没したとされるバナーラス北方のマグハル (Maghar) には、ムスリムが管理する墓廟 (mazār) とカビール派が管理する墓廟 (samādhi) のふたつが現在立っている<sup>7)</sup>。

カビールは、おそらく識字能力がなかったとされ、後世に文字化されたテキストが伝わっている。彼の詩の一部は、弟子たちによって『ビージャク』としてまとめられた [カビール (橋本訳注) 2002; Kabīr (Hess and Singh trans.) 2002]。また、15世紀末にシク教を開いたナーナクは、カビールから多大な影響を受けたとされ、シク教の聖典『アーディ・グラント』にカビールの詩が多数収録されている。加えて、カビールの作とされる膨大な数の詩が口承で伝えられてきた。ヴィルマーニーのカビール・プロジェクトは、明らかにこの口承伝統に注目している。リンダ・ヘスは、伝承された詩の言語が多様に変化を見せることは、いかに広範な人びとがカビールを歌い継いできたかを示すとしている [Hess 2015: Chap 2]<sup>8)</sup>。このことは、多様な人びとがカビールを「流用」でき、そのテキストが様々な解釈を許容してきたことをも意味する。カビールは通常はヒンディー文学史上に位置づけられることが多いが、ウルドゥー文学史の系譜にカビールを位置づけることも珍しいことではない<sup>9)</sup>。

カビール・プロジェクトで繰り返し言及されるのは、どのような属性も持たない唯一で真なる実在としての神の探求というカビールの中心的な主題である。彼の詩では、民衆によく知られたラームの名前が神への呼びかけとしてよく出てくるが、そのように呼んだとしてもその対象は「ラーム」という属性を持った存在なのではない。そうではなく、形をもたず「無属性 (nirguṇa)」の絶対的な真実性に帰依すべきことを説いたのである。神は寺院やモスクの中ではなく、ひとりひとりの心の中に存在するのだとカビールは強調した。そして、儀礼や聖典の権威を否定し、ヒンドゥーとイスラームの教条主義や、ヴァルナ差別<sup>10)</sup>を激しく非難したのである。こうした主張は、神へのバクティ (信愛) を通じて、神との合一を実現し解脱を得ることを説いた、中世北インドの数多くの神秘主義詩人と共通するものである。彼らバクティ詩人たちは、神への帰依を夫婦や恋人のあいだの愛の詩として表現した<sup>11)</sup>。

カビール・プロジェクトの作品を読解するためには、中世北インドのスーフィー (イスラーム

6) カビール自身がムスリムの両親の間に生まれた、あるいはブラーフマンとして生まれたがムスリムの織工に養子として育てられたなど複数の伝承があるが実際のところは不明である。

7) カビールの名前やマグハルの墓廟については、Dharwadker [2005] の序文がわかりやすい。

8) ヘスはマディヤ・プラデーシュ州のマルワールでカビールの詩を歌う楽師の調査を2002年に開始し、そこでヴィルマーニーと出会っている。彼女の活動の記録と思索をまとめた『歌の身体』には、カビール・プロジェクトの活動についても随所で描かれている [Hess 2015]。

9) たとえば、Jālibī [1977: 113], Kāshmirī [2003: 35-41], Faruqī [2001: 111] など。ペルシア文字のヒンドゥスターニー語で編まれたカビールの詩集としては例えば Kabīr [1868]。

10) 本来は「色」を意味する語で「種姓」とも訳される。ブラーフマン (司祭階級)、クシャトリア (王侯・武士階級)、ヴァイシャ (庶民)、シュードラ (隷属民) という階層として人びとを区分する社会観。この階層の外に「不可触民」(現在はダリト dalit と呼ばれることが多い) として差別の対象となってきた人びとが位置づけられる。

11) バクティ信仰と当時の社会状況については、ヘーダエートウツラ [1981], ドゥヴィヴェデー [1992 (1940)], 橋本 [1994; 2006], Agrawal [2015] などを参照。

ム(の神秘家)たちについても確認しておく必要がある。北インドにイスラームが浸透した大きな要因のひとつは、ガズナ朝期の11世紀より陸上交通の要所からインド亜大陸に広がったスーフィーたちの活動であった [山根 2021: 50]。スーフィーたちもまた、世界の真の存在者である神との合一を神への愛の詩のかたちで説いたが、こうした信仰実践はバクティ信仰と親和性が高く、民衆に広く受け入れられた。バクティ詩人が呼ぶ「ラーム」や「クリシュナ」の名前は、スーフィーが呼ぶ「アッラー」の名前と矛盾することなく共鳴した。そしてカビールもまた、ラームとアッラーの名前に矛盾を見出さない詩人のひとりであった。人びとによるこうした信仰実践の表現は、カビール・プロジェクトの映像作品でも随所に見ることができる。

いまひとつカビール・プロジェクト作品を読解するための前提として確認しておくべきは、ヒンドゥー原理主義の運動についてである<sup>12)</sup>。この勢力は、1980年代以降のインド社会の変動の中で、経済的に困窮した人びとを主な対象に草の根の社会活動を展開して支持を拡大した一方で、ムスリムを仮想敵としたヒンドゥー共同体の団結を謳い結束力を強めた。その運動の典型的なものがラーム生誕寺院再建運動である。その標的となったのはウッタル・プラデーシュ州のアヨーディヤーにムガル期より存在したバーブルのマスジッドと呼ばれるモスクであった。インド人民党(1980年結党)の指導者たちは、このモスクがかつてラーム神の生誕地にあった寺院を破壊した上に立っていると主張し、「不正義」を正すべきであると唱えた。その結果、バーブルのマスジッドは1992年に群衆によって破壊されてしまった。ムスリムへの敵対心を煽るこうした政治戦略でインド人民党は支持を拡大し、1998年連邦下院総選挙での勝利によってアタル・ビハリー・ヴァージペーイー政権が生まれた。アヨーディヤー事件後に実施された考古学調査では、ムガル勢力が破壊したとされるラーム生誕寺院が存在した証拠は見られなかった。しかし、ヒンドゥー原理主義勢力は、この跡地に政治的・宗教的な象徴性を与え、寺院建立運動を展開した。多くの人びとが、金銭や建材を寄進し、カールセーワク(kārsevak: 奉仕者)としてアヨーディヤーに赴くかたちでこの運動に参加した。

2002年2月27日、西インドのグジャラート州ゴードラーで列車火災がおこり、アヨーディヤーから乗車したカールセーワクを含むヒンドゥー教徒58名が死亡した。火災の原因は明らかでないが、当時の州首相ナレンドラ・モーデーはこれを計画的なテロリズムだと発言し、地元紙は宗派感情を煽る報道を展開した。翌28日から州内の広範囲でムスリム居住地区が暴徒に襲撃された。6月まで断続的に続いた暴動で推計2000人以上が死亡し、その多くはムスリムであった<sup>13)</sup>。当時グジャラート州アフマダーバードにいたヴィルマーニーは、暴動を受けて翌2003年に映像制作をはじめた [Virmani 2010]。

一方で、ウェブサイト「驚異の街」が計画された時期は、モーデーがインド共和国の連邦

12) ヒンドゥー原理主義の歴史については、小谷 [1993]、近藤 [2015]、杉本 [2015] など。

13) グジャラート暴動については、多くの研究がなされている。日本語での研究としては、近藤 [2009; 2015]、中溝 [2015] を参照。英語での先行研究は非常に多く、ここで網羅することはできないが、岡山 [2017] が先行研究を整理しており参考になる。

首相となった時期に重なる。2014年の連邦下院総選挙では、2期10年のあいだ続いた国民会議派を中心とするマンモーハン・スィン政権に対してインド人民党が勝利し、グジャラート州首相であったモーデーが連邦首相となった。「驚異の街」のYouTubeチャンネルに動画が投稿されはじめるのはこの年である。その後モーデー政権は、2019年の連邦下院議会総選挙でも大勝利を収めて2期目を迎えた。しかし、同年にインドは深刻な景気後退に陥り、さらに2020年に入って新型コロナウイルスのパンデミックに見舞われ多大な死者を出した。アヨーディヤのラーム生誕寺院の定礎式を首相モーデーが執り行なったのは、パンデミックのさなかの2020年8月5日のことであった。そしてこの年に、ウェブサイト「驚異の街」が公開された。

### 3. カビール・プロジェクトとその作品

#### カビール・プロジェクトの映像作品

ヴィルマーニーは、2003年に撮りはじめた映像を4本の映画としてまとめ、2008年に発表した<sup>14)</sup>。同一のインタビューで撮影されたと思われる素材から切り出された映像が、それぞれの作品に組み込まれている。すべて監督はシャプナム・ヴィルマーニーであり、プロジェクト・アドバイザーとして、カビール研究者のリンダ・ヘスとプルショーッタム・アグラワール (Purushottam Agravāl), 歌手のヴィッディヤー・ラーオ (Vidyā Rāo) とターラー・キニー (Tārā Kinī), 詩人・作家アショク・ヴァージペイー (Ashok Vājpeyī) の名前が並ぶ。謝辞はすべてフォード財団と歴史家スマティー・ラーマスワーミー (Sumathī Rāmaswāmī) に贈られている。四作品のうち、『誰かが聞いている』のエンドロールではヒンドゥスターニー古典音楽家クマール・ガンダルヴァの歌が流れるが、残り三作品のエンドロールではマールワールの楽師プラフラード・スィン・ティパーニヤー (Prahād Singh Ṭipāniyā) の歌が流れる。

『我らが国に來たれ：カビールと友人たちとの旅 (Chalo Hamārā Des)』 [Virmani 2008a] は、プラフラード・ティパーニヤーとリンダ・ヘスそれぞれの、カビールについての思考と対話の旅を追いかける作品である。ティパーニヤー自身と周囲の人びとのダリトとしての経験を通じたカースト差別のテーマをはじめ、口承と記述、宗派アイデンティティ、ジェンダー、無属性の価値といった、カビール・プロジェクトの主要な主題が織り込まれる。題名は、カビールの詩に触発されて付けたとされていて、ティパーニヤーの歌が全編を通して流れる。

थम तो चलो साहिब जी रा देस, बताईं दू थारे भाव नगरी  
 तुम तो चलो मालिक जी के देस, दिखां दू तुम्हें भाव नगरी  
 भाव नगरी हो हेली प्रेम नगरी

14) カビール・プロジェクトの映像作品はオンラインで視聴可能である。http://ajabshahar.com/films/all

君よご主人様の国に行こう、君に心の街について語ってあげよう  
 君よ神様の国に行こう、君に心の街を見せてあげよう  
 心の街に、友よ愛の街に<sup>15)</sup>

「ご主人様の国」「神様の国」あるいは「心の街」「愛の街」とは、唯一で無属性の神＝真実との合一の境地のことであろう。神＝真実は、寺院の中にあるのではなく、各人が自らの内面に見つけるものなのだ。ティパーニヤーは説明する。映画の中でこの歌が最初に流れるのは、彼と父がかつて低賃金労働に従事していたことを物語る場面である。同時に、請われては夜な夜な歌いに出かける、家族からすれば身勝手でもあった若かりし日の彼の様子を妻が語る。次の場面では、ティパーニヤーたちが歌うカビールがいかに自尊心の支えとなったかを、マールワールのダリトの人びとが熱く語る。このようにして、カビールが説いた唯一の神への帰依が、歌を通じてマールワールの社会関係の中で人びとにいかにかに理解されるかが明らかにされていく。見る者は映像を通して現代のカビールの歌の世界にいざなわれるという作りになっている。

『境界-無境界：ラームとカビールとの旅 (Had Anhad)』[Virmani 2008b] は、ヴィルマニーがカビール・プロジェクトを開始する直接の契機となった、宗派問題に正面から向き合った作品である。アヨーディヤーのバーザールを出発点として、マールワールのティパーニヤー、ラージャスターンのミーラーシーの歌手ムクティヤール・アリー (Mukhtiyār ‘Alī)<sup>16)</sup>をそれぞれ訪ね、さらにティパーニヤーとともに国境を超えてカラーチー (パーキスターン) のカウワリー歌手ファリード・アヤーズ (Farīd Ayāz) に会いに行く。同じくカラーチー在住のマンガニヤール歌手シャーフイー・ムハンマド・ファキール (Shāfī Muḥammad Faqīr) が歌うスーフイーの詩がカビールの詩と共鳴する。ヒンドゥー原理主義者たちがその名を叫ぶラームではなく、カビールの無属性のラームが彼らの歌を通じて浮かび上がる。ファリード・アヤーズは歌う。

حد حد تُبے سو اولیاء، اور بیحد تُبے سو پیر  
 حد انحد دونوں تُبے، سو واکو نام فقیر

境界を飛び越えるのはアウリヤー、無境界を飛び越えるのはビール  
 境界と無境界の両方を飛び越える、その者の名をファキールという<sup>17)</sup>

15) ヒンディー語原文は、映画のヒンディー語版の字幕より引用 [Virmani 2008a: 26分15-57秒]。「君」を表す人称代名詞は、マールワール方言の थम (tham) と標準ヒンディー語の तुम (tum) が両方使われているが字幕のまま引用した。映画のヒンディー語版はつぎの URL で公開されている。https://youtu.be/liSbaO4BH9g

16) ムクティヤール (Mukhtiyār) は、サンスクリット語起源の形容詞 mukhya (主たる、上位の) と、アラビア語起源の ikhtiyār (権限、力) が合成した語である。

17) ファリード・アヤーズはベルシア文字に囲まれたメディア環境で生活していることと、会話でもベルシア/アラビア語起源の語彙を多用することから、この詩がウルドゥー語に近いものと経験されていると解釈してベルシア文字で書き

アウリヤー、ピール、ファキールはいずれもスーフィーの聖者を指す呼び名である。ファリード・アヤーズによれば、人の進歩には6つの階梯があり、上位の3つがアウリヤー、ピール、そしてファキールの階梯であるという。中でも最終的な階梯にあるファキールは、境界も無境界もすべてを超越する存在なのだと説く。次の場面では、同様の解釈をシャーフィー・ムハンマド・ファキールが述べ、それを受けてティパーニヤーは境界の外に出た者だけが神と一緒にになれるのだと語る。国境を越えた楽師たちの見解が、互いに共鳴している様子が示される。

ファリード・アヤーズはまた、カビールをスーフィーの思想と関連づけて理解する。スイク教の開祖ナーナク、そして17世紀のスルターン・バーフー (Sultān Bāhū), 18世紀のブッレー・シャー (Bullhe Shāh), 19世紀のグラーム・ファリード (Ghulām Farīd) といったパンジャープのスーフィー詩人たちは、彼によればすべてカビールと同じ流れにある。同作品の前段でムクティヤール・アリーも同様に、カビール、16世紀パンジャープのスーフィー詩人シャー・フサイン (Shāh Ḥusain), スルターン・バーフー、ブッレー・シャーの名を並べ、「スーフィーの思想には、クリシュナの名も、アッラーの名も、ラームの名もない。ただ〔神への〕愛の絆があるだけなのだ」と述べる<sup>18)</sup>。このように、宗派の「境界」を越えた精神的な系譜が提示される。

なおこの映画については、インド政府の情報放送省 (Ministry of Information and Broadcasting) の中央映画検定委員会 (Central Board of Film Certification) が、2009年11月5日付で4場面の削除を要求した。このうち3場面については、2010年5月28日に映画検定控訴裁判所 (Film Certification Appellate Tribunal)<sup>19)</sup>が削除要求を取り消した。しかし、バーブルのマスジッドの破壊映像と、その破壊を肯定するアヨーディヤーの人びとの語り映された、映画の冒頭部分については削除要求が取り消されなかった。映画制作側はデリー高等裁判所に上訴し、被告の中央映画検定委員会はこれらの場面が特定のコミュニティの心情を害し社会の混乱を招きかねないと主張した。判決は原告側の全面勝訴となりすべての削除要求は撤回された<sup>20)</sup>。

『バーザールに立つカビール：神聖なカビールと世俗的なカビールとの旅 (Kabīrā Khaḍā Bāzār Men)』 [Virmani 2008c] は、ティパーニヤーのカビールと、それと矛盾するさまざまなカビール理解との対話の物語となっている。大きな信仰集団であるカビール派に、周囲の驚きをよそにティパーニヤーが参加したことをきっかけに繰り広げられる対話が物語のひとつの軸である。他方で、1990年代にマールワールでカビールを歌う音楽家たちを社会運動に糾合したNGO エー

起こした。デーヴナーグリーとローマ字翻字は「驚異の街」サイトで読むことができる。http://ajabshahar.com/couplets/159/Had-Had-Tape-So-Auliya

18) カビールとブッレー・シャーを、北インドのバクティ詩人やスーフィー詩人たちの系譜に位置づけてその類似性を示している論考として山根 [2021] を参照。

19) 映画検定控訴裁判所は、中央映画検定委員会の決定に対して不服を申し立てることができる情報放送省内の機関であるが、2021年4月4日に廃止された。

20) *Srishri School of Art, Design and Technology v. The Chairperson, Central Board of Film Certification*, 178 (2011) DLT 337. また、Bhatia [2018: 11, 188] も参照。

クラヴィヤ (Eklavya) に関係した活動家と楽師をヴィルマーニーが訪問する<sup>21)</sup>。信仰と社会運動という組織をめぐる対話篇となっている。

कबीरा खड़ा बाज़ार में, लिए लुकाठी हाथ  
जो घर जारे आपना, चले हमारे साथ

カビールはバーザールに立つ、松明を手に持って  
自分の家を燃やす者は、我らと共に来たれ<sup>22)</sup>

この詩は、四部作の他の作品でも言及されている。『誰かが聞いている』では、アショーク・ヴァージペーイーがつぎのように述べている。「家」とは己の執着のことであり、それを燃やし解放されてやって来るならば、自分と一緒に探求の道を進むことができる、カビールはバーザールの中でそう呼びかけているのだと。「最近の行者たち」のように聖灰を受けるといった安易な救済を与える話ではなく、執着からの解放の後には探求がはじまると説いているのだという [Virmani 2008d: 23分10秒-24分32秒]。『境界-無境界』ではファリード・アヤーズが、カビールは「剥き出しの刀 (nangī shamshīr)」のように、すべてを破壊する存在なのだと強調する。そして、あらゆる宗教の権威を破壊できたのはカビールだけであると述べる。それに応じて、ヴィルマーニーがこの詩を暗誦すると、彼は笑い声を立てて大きく頷く [Virmani 2008b: 73分15-25秒]。このようにこの詩は、己の執着や儀礼的宗教の権威など、自身を縛るものを破壊することと結びつけて理解されている。『バーザールに立つカビール』では、最終的にカビール派から抜けることになるティパーニヤーの姿、そして政治的ヒन्दゥー原理主義についてそれはヒन्दゥーではないと言いきる元ナクサライト運動家でカビール派の指導者ヴィヴェーク・ダース (Vivek Dās) の言葉に、既存の信仰の縛りからの解放の契機を読みとることができる。もちろん、その解放の後にはそれぞれの探求が続けられるのである。

『誰かが聞いている：クマールとカビールとの旅 (Koī Suntā Hai)』 [2008d] では、ヒन्दゥースターニー音楽の音楽家クマール・ガンダルヴァ (Kumār Gandharva, 1924-1992) による音楽の探求を追いかける旅が描かれる<sup>23)</sup>。子どもの頃からその才能が目されたガンダルヴァは、23歳のときに結核にかかりふたたび歌うことはかなわないと診断される。療養のために過ごしたマールワールでカビールの歌に出会い、自らの解釈によるカビールを回復後に歌うようになる。映画の題名は、ガンダルヴァが歌うカビールの詩からとられている。

21) NGO エークラヴィヤについては Hess [2015: Chap 6]。

22) Kabira Khada Baazaar Mein (01), *Ajab Shahar*, [http://ajabshahar.com/couplets/60/Kabira-Khada-Baazaar-Mein-\(01\)](http://ajabshahar.com/couplets/60/Kabira-Khada-Baazaar-Mein-(01))

23) この作品を観るにあたっては、Hess [2009] を合わせて読むことで理解を深められる。

सुनता है गुरु ज्ञानी  
गगन में आवाज़ हो रही, झीनी, झीनी

知恵ある師が聞いている

天空に声がひびく、かすかに、かすかに<sup>24)</sup>

ヴィルマーニーのカメラは、ガンダルヴァが過ごしたマールワールで、カビールの歌が現在いかに歌われているか、そして人びとが「カビールの歌」をいかに新たに創作するかをとらえる。ここで浮上する「真正性」の問題は、ヴィルマーニー自身がドキュメンタリー映像制作にあたって向き合ってきたものでもあった。彼女は、カビール・プロジェクトに先立つ論考で、「記録された現実」が「再創造された現実」に優越するとは限らないと述べている [Virmani 2001: 242]。人びとが創り出し続ける「カビールの歌」とはいったい何であり、どのような力を持つものなのか。ヴィルマーニーのカメラは、そうした「カビールの歌」を収集する、ポーパールのアーディヴァースィー民衆芸術協議会 (Ādivāsī Lok Kalā Pariṣad) にカピル・ティワリー (Kapil Tiwārī) を訪ねる。ティワリーは、人びとが創作する「カビールの歌」について、カビールの言葉ではなくカビールの真実をつかんでいるがゆえに価値があるのだと述べる。さらにティワリーにとっては、この真実の探求はアーディヴァースィー (いわゆる「部族民」) の権利の主張につながるのである。さらに彼は、古典音楽という権威の枠外で自分自身のカビールを探求し再創造した点に、ガンダルヴァと民衆のカビールとのつながりを見る。ガンダルヴァの歌にある「知恵ある師」すなわち自身の内面にある真実の探究こそが、彼とマールワールの人びとが歌を通じて行なってきたことなのだという作品の主張が浮き彫りにされていく。

2002年グジャラート暴動への反応として出発したカビール・プロジェクトは、最終的には多方面からカビールと人びとの思索を追う、四つの対話篇の映像として結実した。明確に宗派的原理主義に対抗する物語を提示するのは『境界 - 無境界』であるが、ほかの三作も「境界」の否定というカビールの主題を理解するためにさまざまな補助線を与えてくれる。全体として、宗派的原理主義、儀礼的宗教の権威、カースト差別、ジェンダー、そして自己の内面の探究といった、人びとが日常の中で向き合う問題が、連続したものとして示されるのである。

当初これらの映画作品には英語の字幕がつけられていたが、2010年にマールワールで開催されたカビール・ヤートラーに先立ち、ヒンディー語のナレーションが吹き込まれた版もつくられた。後にはカンナダ語字幕版もつくられている。また、リンダ・ヘスの企画により、インド外務省のインド文化交流評議会の支援を受けて、ティパーニヤールの楽団のアメリカ公演が2003年に実現しており、その模様は『我らが国に来たれ』に映されているほか、2本組の映画『驚異

24) Koi Sunta Hai Guru Gyaani, *Ajab Shahar*, <http://ajabshahar.com/songs/details/113/Koi-Sunta-Hai-Guru-Gyaani>

の街：アメリカのカビール (*Ajab Shahar: Kabir in America*)』[Virmani 2009]として独立した作品となっている。また、ラージャスターン・カビール・ヤートラー2012の様子も、「驚異の街」チームの名義で映像化されている。このほか、10本の冊子付音楽CDが出されている<sup>25)</sup>。

### ウェブサイト「驚異の街」

カビール・プロジェクトの映画制作のために収集した記録をインターネットで公開するという計画は、すでに2015年までに固まっていた [Hess 2015: 102; Hawley 2015: 335]。「驚異の街 (Ajab Shahar)」というタイトルは、ティパーニヤーと楽団のアメリカ公演記録映画のタイトルでもあるが、これもカビールの詩からとられたものである。

थारा रंग महल में, अजब शहर में, आजारे हंसा भाई  
निर्गुण राजा पे, सिरगुण सेज बिछाई

汝の色とりどりの宮殿に、驚くべき街に、コブハクチョウ<sup>26)</sup>の兄弟よ来たれ  
無属性 (nirgun) の王の上に、顕現した (sirgun=sagun) 寝具が広げられる<sup>27)</sup>

YouTubeの「驚異の街」チャンネルでは、カビール・プロジェクトの映画から歌や語りなどの単位で短く切り出された動画が、2014年頃からアップロードされはじめた<sup>28)</sup>。もちろん、これらの動画はYouTubeのインターフェイス上で検索することが可能であるし、Googleなどのウェブ検索サイト上の検索結果にも出てくる。2020年に公開されたウェブサイト「驚異の街」は、YouTubeのAPI<sup>29)</sup>を使って動画を自サイト上に表示するものである。つまり、YouTubeのプラットフォームに依存したアプリケーションとして構築されている。このアプリケーション上では、動画や音声を多様な組み合わせで表示したり、テキスト（デーヴナーグリー文字、ローマ字、英語翻訳）や記事・論説と組み合わせたり、関連する動画どうしを並べたりすることができる。映画のストーリーとは異なった文脈に、記録を動的に組み替えられる。

ここで生じたのは、ネットワーク化された動画の集積が、「アーカイブ」として使うことを利用者に促すようになったということである。カビール・プロジェクトの2008年の四部作では、

25) 残念ながら、本稿の執筆にあたっては、CDのフォーマットで入手することはできなかった。「驚異の街」ウェブサイトにて聴取することは可能である。

26) ブラフマー神の乗り物。

27) <http://ajabshahar.com/songs/details/178/Thaara-Rangmahal-Mein>

28) <https://www.youtube.com/c/Kabirproject-ajabshahar>

29) Application Programming Interfaceの略。あるシステムが提供するデータや機能を、別のシステムが利用できるようにするための仕組みである。ここでは、YouTubeが提供するデータと機能（再生・音量調整・拡大等々）を、APIを使って「驚異の街」サイト側が利用している。当然、YouTube側の方針や提供する機能が変更されれば、利用する側は影響を受ける。

ひとつのインタビューで記録された動画が、複数の映像作品のプロットに組み込まれ、それぞれの文脈における意味を生み出していた。もちろん、こうしたプロットを持つ作品も、見る者に「アーカイブ」としての使い道を提供する可能性はあった。たとえば、ティパーニヤーの息子と仲間たちが、ヴィルマーニーの映像を通じて、ムクティヤール・アリーやファリード・アヤーズのレパトリーを真似て演じるようになったことをヘスが記述している [Hess 2015: 70]。それでも、映画作品のプロットが読解の可能性を制約するという認識が共有されていたことは確かであろう。『境界 - 無境界』をめぐるデリー高等裁判所の判決は、「作品全体」が持つ意味を根拠に、作品の一部を削除すべきだとする中央映画検定委員会の要求を退けたのであった。

映画作品のあらゆる場面がコンテンツとして切り出され、ウェブ上で検索や並べ替えが可能になると、それらはプロットの制約から解放されることになる。カビールの歌を、「自由」に「クリエイティブ」に切り取って組み替えることを、「驚異の街」のコンテンツの集積はわたしたちに促している。実際に、ウェブサイト「驚異の街」は、映画の音源を含むさまざまな歌をランダムに再生する「ラジオ」機能を提供し、まだ積極的に活用されていないようであるが二次創作や教材利用も閲覧者に呼びかけている。ここでは、子どもたちを含む閲覧者たちが、自由に安全に演劇などの二次創作を披露することが促されているように見える。

しかしこれは、オンライン・コレクションの制作の際にしばしば強調されるような、利便性やアクセシビリティを向上させようとする事例として素直に理解してよいものだろうか。ヴィルマーニーがわたしたちを招待する「驚異の街」とは、まるで美術館のホワイトキューブのような、安全に消毒された明るいアーカイブ空間のことなのだろうか。

カビール・プロジェクトは、無属性の思想を中心に据えて、宗派やカーストやテキストの「境界 (had)」を問い直してきたのであった。制作した映像や声を、境界で囲われた「アーカイブ」という領域に格納してしまうということは、これまでのヴィルマーニーたちの作品の企図と矛盾してしまうのではないか。カビール・プロジェクトの作品を、アーカイブに閉じ込め固定することで、権威性が生じることにヴィルマーニーたちが無自覚であるとは考えにくい。カビールはまさに典籍の権威、書かれ記録されたものの権威を否定した存在と理解されてきたはずだ。

このことは、アーカイブなるものが帯びる権力の問題と関わっている。ホーリーたちのつぎの指摘はここで重要であろう。

アーカイブは歴史の偶然でできるものではない。それは意図的で強い力によって作られるのだ。しばしばそうした力は、階級、カースト、ジェンダー、言語などにもとづいて、他の者たちを排除してきたのだ。同じように、歴史的に見ると、アーキビストやアーカイブのスポンサーの欲望によって、バクティは源流において編集されてきたのである。 [Hawley, Novetzke & Sharma 2019: 19]

ヴィルマーニー自身、ドキュメンタリーの権力性について、「悪意をもって使われることもあれば、わたしたちの精神を解放するために使われもする」ことにカビール・プロジェクト以前から自覚的であった [Virmani 2001: 242]。そして「驚異の街」で彼女は、実際に特定の声を意図的に排除している。「驚異の街」ウェブサイト上の「省察 (reflections)」ページでは、映画の中のインタビュー映像を中心に、カビールに関する人びとの考察が並べられている。ここでは、『我らが街に来たれ』でヘスとヴィルマーニーを前に偏狭な信仰・人種・カーストの理解を披露したカビール派の聖職者たち、『境界-無境界』の冒頭でバーブルのモスクの破壊を肯定したアヨーディヤの街の人びと、『バーザールに立つカビール』で国を守るためにカビールの軍隊 (Kabir Sena) が必要だと主張したカビール派のマハント (僧団の長) などの、カビール・プロジェクトの価値観に対立する声は掲載されていない。ヴィルマーニーは、特定の声を排除するというアーカイブの権力をここで行使して見せているのである。

それでは、ヴィルマーニーが「アーカイブ」という権威の装置を構築し、アーカイブの権力の行使をあえて行なって見せていることの意味は何だろうか。ここで確認しておきたいのは、カビール・プロジェクトがアート・プロジェクトだということだ。そうであれば、ウェブサイト「驚異の街」を、アーカイブなるものを模倣しているアート作品として解釈することができるだろう。マルセル・デュシャン以降のアートの歴史は、模倣という方法を通じて「アートとは何か」を問うことで展開してきた。カビール・プロジェクトのアート作品としての「驚異の街」を、その例外と考える理由はない。現代アートの文脈で理解するなら、「アーカイブ」を模倣することでアーカイブとは何かと問いかけているのが「驚異の街」という作品だと理解できる。この作品は、アーカイブなるものが持つ「境界」と権威の存在を、行為遂行的に指し示している。これが、「驚異の街」が持つ批評的な効果だと理解できるだろう。このアーカイブに対する批評の重要性は、ウェブ上のアーカイブなるものが現在のインド政治においていかなる力を発揮しているかを考えると、その重要性が理解できる。

#### 4. 政治言説の中のカビール

ナレーンドラ・モーディー政権は、2014年5月26日に成立して以来、大量のオンライン・コンテンツを制作し公開してきた。モーディーの演説・発言・ラジオ番組などは、その多くがYouTubeの公式チャンネルで公開され、APIを通じて首相公式ウェブサイトや自身の公式ウェブサイトに表示されている。首相となって以降に記録された膨大な発言のテキストとインド諸語への翻訳が公開されており、さらに公式Twitterアカウントでもその引用が発信される。つまり、公式ウェブサイトがアーカイブとして機能しており、それがメディア戦略のひとつの柱となっている。そのモーディーのアーカイブの中にも、カビールとバクティ詩人たちが登場する。

2014年に政権をとってからのインド人民党は、教育・文化・社会などの制度面で、ヒन्दウー

至上主義の浸透を進めた。一方で、ヒンドゥー至上主義的主張を露骨に打ち出すことは得策ではないと判断し、モーディー自身が過激な言動を行なうことは控えられてきた [三輪 2021: 25]。加えてモーディーは、非ヒンドゥーのコミュニティとの対話の姿勢も示してきた。2016年世界スーフィー・フォーラム (World Sufi Forum 2016) におけるモーディーの演説では、スーフィズムがインドにおける共存・共生を促進するような思想であったと評価しつつ、インドを多様なコミュニティの共生がすでに実現している社会として提示しようとした [二宮 2021]。では、カビールやバクティの記号はモーディーの言説でいかに引用されているのだろうか<sup>30)</sup>。

モーディーは2018年6月28日に、カビール逝去500年祭<sup>31)</sup>に際して、マグハルを訪問している。マグハル訪問に先立って、首相の公式ラジオ番組『内奥の思惟 (Mann ki Baat)』<sup>32)</sup>で、カビールのドーハー (二行詩) を引用してつぎのように述べている。

कबीर सोई पीर है, जो जाने पर पीर ।  
जो पर पीर न जानही, सो काफिर बेपीर ॥

カビールは言う、他の者の苦しみを知る者こそピール (聖者) なり  
他の者の苦しみを知らない者は、不信心者でピールならざる者なり

意味はこうです、真実のピールの聖者 (sant) とは他の者の苦しみを知り理解する者であり、他の者の苦痛を知らぬ者は無慈悲な者であると。カビールダース様は、社会の調和を特に強く唱えました。あのお方の考えは、あの時代にあって非常に進歩的でした。世界で衰退と争いが繰返されていた時代に、あのお方は平和と調和のメッセージを出しました。そして、人びとの心をひとつにし意見の対立を解消する仕事をなしたのです。<sup>33)</sup>

これに続いて、カビールとのつながりからナーナクの思想に話が移り、さらにナーナクが活動した地域とのつながりから英領期パンジャブのジャリヤーンワーラー・バーグで1919年4月13日に起こった虐殺事件へと話題が移る。この番組の時点ではまだ9ヶ月以上先のことではあったが、虐殺事件の100周年を念頭に置いてのことであろう。この事件を批判して、暴力と残虐行為によってはどのような問題も解決されえないとし、勝利は「平和と非暴力」そして「猷

30) ここでは、カビールに関する言及を中心に、バクティの記号が引用されているテキストを読解するが、計量分析を含む網羅的な検討はできていない。今後の課題としたい。

31) 聖者の死は現世からの解放あるいは神との合一を意味すると考えられ命日が祝われる。

32) 直訳では「心の言葉」だが、「Inner Thought」と英訳されることが多くそのようにした。

33) 本稿でのモーディーの演説は、紙幅の制約からドーハーのみ原文で引用する。ウェブサイト上の書き起こしの誤りは、音声に従って修正している (以下の引用でも同様)。

PM's "Mann Ki Baat" programme on All India Radio, June 24, 2018,  
[https://www.pmindia.gov.in/hi/news\\_updates/प्रधानमंत्री-का-आकाशवाणी-15](https://www.pmindia.gov.in/hi/news_updates/प्रधानमंत्री-का-आकाशवाणी-15)

身と犠牲」によって達成されるのだと続けた。このように、ここでカビールとナーナクは、インドのナショナリズムの物語の中に位置づけられた。

6月28日の訪問当日のモーデーは、ウッタル・プラデーシュ州都ラクナウーから州首相のヨーギー・アディッティヤナートを伴ってマグハルに赴いた。ムスリムの墓廟を訪問した際には、墓石に被せられる覆い布 (cādar) を供物として贈った。また、新たに2億4000ルピーをかけて開かれる聖カビール・アカデミーの定礎式も行なわれた<sup>34)</sup>。この訪問後も、毎年のカビール命日祭の際には供物を贈り、SNSなどでそのつながりを再確認している<sup>35)</sup>。

訪問につづけて、カビール派の墓廟の前で演説し、2019年下院総選挙に向けたインド人民党の選挙戦開始を宣言した<sup>36)</sup>。演説の中では、もちろんカビールに言及しており、その様子を首相官邸ウェブサイトの首相動静にあげられている動画で見ることができる<sup>37)</sup>。この演説の中から、カビールの表象にかかわる部分を検討しよう。

あのお方 (カビール) は、ジャーティとパーンティの差別を打ち壊しました。すべての精神のための唯一のジャーティ、これを宣言したのです。そして、カビールダース様は、自らの内面の自我を減して、そこに顕現されるイシュワル (神) にダルシャン (拝観) する道をお示しになったのです。あのお方はすべての者のものであり、そのためすべての者はあのお方のものになったのです。あのお方は言いました。

कबीरा खड़ा बाजार में मांगे सबकी खैर ।  
न काहू से दोस्ती, न काहू से बैर ॥

カビールはパーザールに立ちすべての者の安寧を願う  
誰との友情もなく、誰への敵意もなく<sup>38)</sup>

このように、カースト差別を批判し、内面の探求に人びとをいざなう聖者の姿が描かれ、モーデーがドーハーを暗誦すると大きな歓声があがった。さらに、バクティ聖者たちの歴史的な役割について述べる。

34) <https://twitter.com/PMOIndia/status/1012221622869082114>

35) Narendra Modi Official Twitter, 4: 14 PM · Jun 24, 2021, <https://twitter.com/narendramodi/status/1407960360150200325>

36) NDTV, Jun 28, 2018, <https://www.youtube.com/watch?v=k1lGsZVUD4Q>

37) モーデー公式ウェブサイトより。引用テキストは動画に従って一部修正している。  
<https://www.narendramodi.in/hi/text-of-pm-s-address-at-maghar-uttar-pradesh-on-the-occasion-of-the-500th-death-anniversary-of-the-great-saint-and-poet-kabir-540643>

38) 注37の動画 (12分26秒-13分14秒)。ジャーティ (jāti) は生まれを同じくする者の集団、パーンティ (pānti) は食を共にすることができる者の集団を意味する。ともに、いわゆる「カースト」を意味する概念として理解される。

みなさん、時に社会に訪れた内なる害悪を断つために、その時々によりシ（聖仙）たち、ムニ（牟尼）たち、アーチャーリヤ（学匠・祭官）たち、バグワント（神のような人）たち、サント（聖者）たちが正道に導いてくれたこと、これが我が国の偉大な大地の苦行であり、その徳性なのです。何百年にもわたる隷従の時代に、この国の精神が守られ続け、この国の平等性と友愛が守られ続けたのは、まさにこれらの偉大で威厳ある聖者たちのおかげだったのです。<sup>39)</sup>

さらに演説は、インド社会に現れた、正道を示す「聖者」たちの名前を挙げていくことになる。ブッダ、マハーヴィール（ジャイナ教の開祖）、カビール、スールダース、グル・ナーナク（シク教の開祖）の名前を並べてインドの東西南北を問わずこうした有徳の人びとが現れたとし、さらに長い名前をリストを挙げる。曰く、南にマドヴァ、ニンバルカ、ヴァッラバ、バサヴェーシュワル、ティルヴァッルヴァル、ラーマヌジャ；西にダヤーナンド、ミーラー・バーイー、エークナート、トゥカーラム、ラームダース、ジュニャネーシュヴァル、ナルスィー・メーヘター；北にラーマナンド、カビールダース、トゥルスィーダース、スールダース、グル・ナーナク、ライダース；東にラーマクリシュナ・パラマハンサ、チャイタニヤ、シャンカルデーヴ。この聖人リストを確認したうえで、ラーマヌジャが神へのバクティの道を指し示し、ラーマナンドがジャーティ差別を批判し、そのラーマナンドがカビールにラームの道を示したという系譜を語る。そして、そのカビールに続いたのが、ライダース、フレ、ガンディー、アンベードカルたちだったと位置づける<sup>40)</sup>。

ここで話が一転し、現在の政治的な対抗勢力の批判を始める。憲法を作り平等を説いたアンベードカルの名前を騙って社会を分裂させようとする勢力がいるという。これはダリトに支持者を多く持ち、アンベードカルの意志を継承することを主張する大衆社会党（Bahujan Samaj Party）を想像させる。実際、演説の後段では、ウッタル・プラデーシュ州でインド人民党に対抗する、国民会議派、大衆社会党、社会主義党（Samajwadi Party）の名前を挙げて批判を展開している。つまり、カビールら聖者たちからガンディーとアンベードカルまで続くインドの統合の伝統に反して、これら対抗勢力は社会を混乱させることで政治的利益を得ようとしているという言説になっているのである。

しかし注目したいのは、このように明らかに語られるプロットではなく、ここで何が語られていないのかということである。彼による聖者たちの系譜には、スーフィーやムスリムの名前が挙げられていない点は明白だ。ヴィルマーニーの『境界 - 無境界』でムクティヤール・アリー

39) 注37の動画（14分32秒-15分21秒）。

40) ライダースは皮革業ジャーティ出身の15-16世紀の北インドの詩人、フレ（1827-90）はマハーラーシュトラの19世紀の教育家・社会活動家、ガンディー（1869-1948）はインドの独立運動指導者、アンベードカル（1891-1956）はダリト出身の社会改革運動家・政治家でインド憲法起草者。いずれもカースト差別への反対を唱えた。そのほか宗派の開祖、宗教家、詩人などの名前が並ぶが、紙幅の制約のため個別の説明はできない。詳しくは橋本・宮本・山下[2005]を参照。

やファリード・アヤーズが語った、詩人たちの精神的な系譜と対比するとそれは際立つ。さらに気になるのは、モーディーが「隷従 (ghulāmī)」の時代と呼んでいるのが、どの時代を指すのかということである。カビールではないが、バクティ聖者との関連で「隷従」の時代にモーディーが言及しているのは、2021年9月1日のビデオ会議においてである。これは、クリシュナ意識国際協会 (International Society for Krishna Consciousness: ISKCON) の創始者バクティヴェーダンタ・スワミー・ブラブパーダの生誕125年記念硬貨を公表する際の演説であった。演説の中で、『バガヴァッド・ギーター』12章のバクティ・ヨーガをめぐるクリシュナとアルジュナの対話を引用したうえで、モーディーはつぎのように続ける。

そしてこのバクティ・ヨーガの力は非常に偉大なのです。インドの歴史がその証人です。インドが隷従の深淵に囚われていたとき、不正義と圧制と搾取に苦しめられたインドが自らの知識と力について思考することができなかつたとき、インドの意識に活力を与え、インドのアイデンティティを変えることなく保たせたのは、まさにバクティだったのです。今日学者たちは、もしバクティ時代の社会革命がなければ、インドがどこでどのような有様になっていたかわかったものではないと考えています。しかし、その困難な時代に、大聖人チャイタニヤのような聖人たちが、わたしたちの社会をバクティの精神でつなぎ留めました。彼らは、「自らを信じることへの信仰」のマントラを与えてくれたのです。<sup>41)</sup>

チャイタニヤ (1485–1533) は、クリシュナと恋人のラーダーへのバクティを説いたベンガルの宗教指導者である。彼の時期はベンガルをフサイン・シャー朝が、北インドをローディー朝が支配しており、この文脈でいう「隷従」はイスラーム王権への「隷従」と理解するのが自然であろう。こうした語りにおいて、カビールを含むバクティ聖者たちは、「イスラーム支配」へ隷従する困難な時代に、インド人の統合を維持した存在として提示されているのだと理解できる。つまりバクティ聖者は、ナショナリズムの物語を支えるものと位置づけられているのである。

2019年のインド下院総選挙にあたって、インド人民党と対決した国民会議派も、カビールを譲り渡してしまったわけではない。この選挙で指定カースト留保選挙区として割り当てられたマディヤ・プラデーシュ州のデーワース選挙区に、ブラブラード・ティパーニヤが国民会議派の候補として出馬した<sup>42)</sup>。タンブーラを抱えて選挙活動を行なう彼の姿はメディアの注目を集め、国民会議派党首であったラーフル・ガンディーが、選挙演説と歌をスマートフォンで撮

41) Narendra Modi Official Website, Sept. 1, 2021, <https://www.narendramodi.in/hi/text-of-prime-minister-narendra-modis-address-on-the-occasion-of-125th-birth-anniversary-of-srila-bhaktivedanta-swami-prabhupada-ji-557058> (9分13秒–10分48秒の発言)

42) インドの選挙制度では、歴史的に差別を受けてきた指定カーストと指定部族に留保枠が設けられている。指定カーストのみが立候補できる選挙区と指定部族のみが立候補できる選挙区を設け、州内で持ちまわる仕組みになっている。小選挙区制で、候補者のなかから1名のみ選出される。

影した映像がウェブ上に流れる一幕もあった<sup>43)</sup>。選挙演説でもティパーニヤーは、カビールの無属性への帰依の思想が自らの主張の礎であることを繰り返し述べ、宗派やカーストを超えて民主主義を実現すべきであることを説いた。

デーワース選挙区での投票結果は、インド人民党から出馬した元判事マヘンドラ・スィン・ソーランキーが60%の票を集めて勝利、ティパーニヤーが獲得した票は35%にとどまった<sup>44)</sup>。少なくともこの選挙においては、カビールの無属性の思想を前面に出すティパーニヤーの選挙戦略は功を奏さなかったようである<sup>45)</sup>。連邦下院全体では、インド人民党が改選前より21議席を増やし、543議席中過半数を大きく上回る303議席を獲得して圧勝した。

## 5. 結論

カビール・プロジェクトの映像作品は、カビールの歌を受け継いできた南アジアの楽師たちを訪ねる旅を描くことで、宗派やカーストなどさまざまな「境界」を超えようとする物語を提示する。そしてそのプロットは、ウェブサイト「驚異の街」で解体された。単線的な物語ではなく、検索し並べ変えられるものとして、さまざまな「伝統」が比較可能なものとして提示されるようになった。この「アーカイブ」のインターフェイス上では、どれが真正なカビールなのかも曖昧になる。映画『我らが国に来たれ』でリンダ・ヘスは、スタンフォード大学の講義の中で、南アジア社会におけるカビールのテキストについて、言葉も順序も変わって制御できず、あらゆる場所にカビールとテキストが飛び出してくる (it's just popping up!) と語っている [Virmani 2008a]。歌や語りごとに切り出された動画は、YouTubeのプラットフォーム上に載せられ、Googleの検索結果としてまさに飛び出すようになった。

ヘスは、さまざまに変化するカビールの詩について、境界を持たないカビールの主題の「プール」を考えることができるとしている [Hess 2015: 89]。これは、A.K. ラーマヌジャンが、生物の遺伝子プールになぞらえて、多様なラーマヌヤナが「シニフィアンのプール」を持っていると述べたことを踏まえたものである [Ramanujan 1999: 158]。カビールの歌の動画やテキストを、生存競争のない安全なアーカイブの中に閉じこめることは、長期的には生存可能性を下げてしまうかもしれない。実際、カビール・プロジェクトの作品を受容してきたのは、宗教的な寛容性やリベラリズムの価値観をあらかじめ共有する、ある程度均質的なオーディエンスだったのではないだろうか。ティパーニヤーの歌は、一定の価値観を共有する人びとの中では国境を超えて歓迎されたが、デーワースの有権者には本人が期待したほどは届かなかったようだ。

43) Times of India YouTube Channel, Nov. 5, 2019, <https://www.youtube.com/watch?v=zqTjLx6C8oo>

44) Dewas Lok Sabha Election Result 2019, Business Standard Lok Sabha Elections 2019, [https://www.business-standard.com/elections/lok-sabha-elections-2019/madhya-pradesh/dewas-sc-election-results-9\\_1376.html](https://www.business-standard.com/elections/lok-sabha-elections-2019/madhya-pradesh/dewas-sc-election-results-9_1376.html)

45) もちろん、これはカビールに関する言説のみに注目した印象にすぎず、この選挙の勝敗の要因を理解するためにはより本格的な分析が必要なことは言うまでもない。

カビール・プロジェクトが異議申し立てをしようとしたモーディーの言論は、いまでは高度に効率化されたウェブ上のアーカイブを基盤として展開されている。それに対して、ウェブサイト「驚異の街」という作品はアーカイブの権力性を行為遂行的に指し示している。同時に、楽師たちによるカビールの歌は、ウェブサイト「驚異の街」の公開を待たずしてすでに YouTube を介してウェブ上に解き放たれてきた。これらの歌は、DVD や CD 作品の中では制御できていたかもしれない異なるカビールとも、ウェブの検索画面上では出会うことになる<sup>46)</sup>。たとえばモーディーのカビールは、外国支配やムスリム支配の記憶に対比すべき民族独立の象徴として提示され、国民の統合を呼びかける言説の中に出てくるのだ。『境界-無境界』でムクティヤール・アリーが発する「このカビールは別ものなのか、それとも〔わたしたちが歌う〕あのカビールなのか」[Virmani 2008b] という問いは、何度でも繰り返されることになろう。ホーリーがカビール・プロジェクトを現代のバクティ運動と呼ぶのはこのような文脈においてだと理解できる [Hawley 2015: 335]。カビール・プロジェクトは、「アーカイブ」という「家」を松明で焼き払い、激しい生存競争が行なわれるワールド・ワイド・ウェブというバーザールに立っている。

## 謝辞

筆者は、2019年3月にボンディチェリーの French Institute で開催されたワークショップ *What is an Archive in India and Europe?* に参加する幸運に恵まれた。カビール・プロジェクトから参加した Prashant Parvataneni 氏の報告で、公開前のウェブサイト「驚異の街」のデモ版を見せてもらうことができた。急な飛び入り参加者を受け入れてくれた主催の Benedetta Zaccarello 氏と Kannan Muthukrishnan 氏に感謝する。詩の解釈については、大阪大学大学院言語文化研究科の Vedprakash Singh 先生のご助言を仰いだ。また、ふたりの匿名の査読者の先生からは、非常に有益なご助言を得た。この調査旅行は、東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構南アジア研究センター (TINDAS) の研究費によって行なった。ここに深く謝意を表したい。本稿の内容の誤りについては筆者がすべての責を負うものである。

## 参考文献

- Agrawal, Prushottam. 2021. *Kabir, Kabir: The Life of India's Greatest Poet-Mystic*. Chennai: Westland Poorna Publications.
- Bhatia, Gautam. 2018. *Offend, Shock, or Disturb: Free Speech under the Indian Constitution*. New

46) 夫を火葬する火に焼かれて寡婦が殉死するサティの慣習を肯定的に歌うカビールの詩が、ティバーニヤールのレパトリーのひとつになっている。オーディオ CD を制作する際に、ヴィルマーニーがその部分を編集し削ったことをヘスが証言している [Hess 2015: 102]。

- Delhi: Oxford University Press.
- Burton, Antoinette. 2021. “Digital Methods + Empire Histories = New, Old, and Emerging Practices.” *Journal of World History* 32(2) : 191–97.
- Cohen, Daniel J. and Rosenzweig Roy. 2006. *Digital History: A Guide to Gathering, Preserving, and Presenting the Past on the Web*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Dharwadker, Vinay. 2005. *Kabir: The Weaver’s Songs*. New Delhi; New York, NY: Penguin Global.
- ドゥヴィヴェーデー, H. (坂田貞二・宮元啓一・橋本泰元訳). 1992 (1940). 『インド・大地の讃歌：中世民衆文化とヒンディー文学』. 春秋社.
- Faruqi, Shamsur Rahman. 2001. *Early Urdu Literary Culture and History*. New Delhi: Oxford University Press.
- 橋本泰元. 1994. 「カビールの原典に見るカースト批判」. 山崎元一・佐藤正哲編『歴史・思想・構造』（叢書カースト制度と被差別民1）. 明石書店, pp.245–282.
- . 2006. 『インド中世民衆思想の研究』. ノンブル社.
- 橋本泰元・宮本久義・山下博司. 2005. 『ヒンドゥー教の事典』. 東京堂出版.
- Hawley, John Stratton. 2015. *A Storm of Songs: India and the Idea of the Bhakti Movement*. Cambridge, MA & London: Harvard University Press.
- Hawley, John Stratton, Christian Lee Novetzke, and Swapna Sharma. 2019. *Bhakti and Power: Debating India’s Religion of the Heart*. Seattle: University of Washington Press.
- ヘーダエトウツラ, M(宮元啓一訳). 1981. 『中世インドの神秘思想：ヒンドゥー・ムスリム交流史』. 刀水書房.
- Hess, Linda. 2009. *Singing Emptiness: Kumar Gandharva Performs the Poetry of Kabir*. London, New York and Calcutta: Seagull Books.
- . 2015. *Bodies of Song: Kabir Oral Traditions and Performative Worlds in North India*. New York: Oxford University Press.
- Jālibī, Jamīl. 1977. *Tārīkh-e Adab-e Urdū (Qadīm Daur): Āghāz se 1750 tak*. Lāhor: Ejūkesional Publishing Hāus. [ウルドゥー語『ウルドゥー文学史（初期）：始まりから1750年まで』]
- Kabīr. 1868. *Gyān Samāj*. n.p.: Matba’ Gulzār-e Hind. [ウルドゥー語『知恵の集まり』]
- Kabīr (translated by Linda Hess and Shukdeo Singh). 2002 [1983]. *The Bījak of Kabir*. New York: Oxford University Press.
- カビール (橋本泰元訳注). 2002. 『宗教詩ビージャク：インド中世民衆思想の精髓』. 平凡社.
- Kāshmirī, Tabassum. 2003. *Urdū Adab kī Tārīkh: Ibtedā se 1857 tak*. Lāhor: Sang-e Mīl Publications. [ウルドゥー語『ウルドゥー文学の歴史：起源から1857年まで』]
- 近藤則夫. 2009. 「インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの展開」. 近藤則夫編『インド

- 民主主義体制のゆくえ：挑戦と変容』。アジア経済研究所，pp.267-316。
- . 2015. 『現代インド政治：多様性の中の民主主義』。名古屋大学出版会。
- 小谷汪之. 1993. 『ラーマ神話と牝牛：ヒンドゥー復古主義とイスラム』。平凡社。
- 三輪博樹. 2021. 「2010年代のインド政治：インド人民党による一党優位状況の成立」。堀本武功・村山真弓・三輪博樹編『これからのインド：変貌する現代世界とモディ政権』。東京大学出版会，pp.13-36。
- 中溝和弥. 2015. 「グローバル化と国内政治—グジャラート大虐殺と「テロとの戦い」」。長崎暢子・堀本武功・近藤則夫編『深化するデモクラシー』（シリーズ現代インド3）。東京大学出版会，pp.219-244。
- 二宮文子. 2021. 「インド共和国におけるスーフィズムと共生のイメージ」。東長靖，イディリス・ダニシマズ，藤井千晶編『イスラームの多文化共生の知恵—周縁イスラーム世界のスーフィズムに着目して—』。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科，pp.63-75。
- 岡山誠子. 2017. 「インド・グジャラート州における反ムスリム「暴動」をめぐる—「暴動」生産の政治と市民社会」。『アジア研究』63(1): 27-45。
- Ramanujan, A. K. (edited by Vinay Dharwadker). 1999. *The Collected Essays of A. K. Ramanujan*. New Delhi: Oxford University Press.
- 杉本良男. 2015. 「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学：南アジア宗教ナショナリズムの病い」。三尾稔・山根聡編『英領インドにおける諸宗教運動の再編：コロニアリズムと近代化の諸相』人間文化研究機構地域研究間連携研究推進事業「南アジアとイスラーム」，pp.1-40。
- Virmani, Shabnam. 2001. “Women Making Meaning: Telling Stories about Reality in India.” *Feminist Media Studies* 1(2): 233-43.
- . 2010. Walking with Kabir. *Seminar* 605 (electric edition) .  
[https://www.india-seminar.com/2010/605/605\\_shabnam\\_varmani.htm](https://www.india-seminar.com/2010/605/605_shabnam_varmani.htm) [最終閲覧2021-09-15]
- 山根聡. 2021. 「18世紀パンジャーブのスーフィー詩人ブッレー・シャー（Bulleh Shah）の詩に見られる共生思想について」。東長靖，イディリス・ダニシマズ，藤井千晶編『イスラームの多文化共生の知恵—周縁イスラーム世界のスーフィズムに着目して—』。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科，pp.49-61。

## 映像作品

- Ajab Shahar Team. 2015. *The Journey Home: Glimpses of the Rajasthan Kabir Yatra, 2012*. Bangalore: The Kabir Project.
- Virmani, Shabnam. 2008a. *Chalo Hamārā Des/Come to My Country: Journeys with Kabir and Friends (Film)*. Bangalore: The Kabir Project.

- . 2008b. *Had Anhad/Bounded-Boundless: Journeys with Ram and Kabir (Film)*. Bangalore: The Kabir Project.
- . 2008c. *Kabīrā Khaḍā Bāzār Meṅ/In the Market Stands Kabir: Journeys with Sacred and Secular Kabir (Film)*. Bangalore: The Kabir Project.
- . 2008d. *Koī Suntā Hai/Someone Is Listening: Journeys with Kumar and Kabir (Film)*. Bangalore: The Kabir Project.
- . 2009. *Ajab Shahar: Kabir in America, vols. 1 & 2 (Film)*. Bangalore: The Kabir Project.